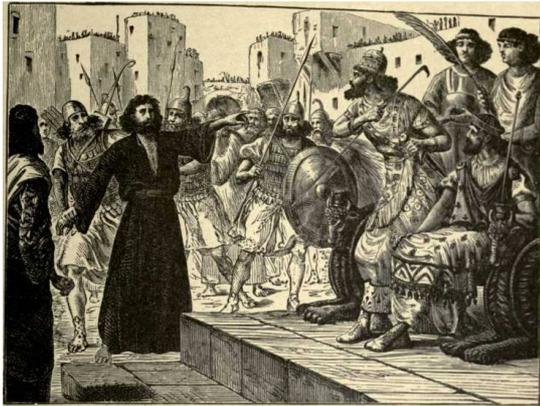


## ～旧約聖書を読んで感じること～ (83) 頬を殴られた預言者ミカヤ



預言者ミカヤ

ミカヤという者です。」(列上22:6-8)

ヨシャファトがアハブを諫めると、アハブは一人の宦官を呼び、急いでミカヤを連れてくるように命じました。ヨシャファトの預言者を信頼しようとする姿勢と、アハブの自分に都合のいい言葉しか聞きたくないという姿勢が、ここで明らかになっています。

更にアハブの宮廷には宦官がいたと聖書は記しています。聖書では**辜丸のつぶれた者、陰莖を切断されている者は主の会衆に加わることはできない。**(申23:2)とありますから、宦官はイザベルが持ってきたフェニキヤの文化といえます。非常に非人間的な、奴隷化された存在です。アハブの時代になって、始めて宦官がイスラエルの宮廷に現れています。

やがて使いの者がミカヤを迎えに行き、王の気に入るような預言をしなさいと忠告します。けれどもミカヤは主が与えられる言葉を語ると言います。そして、アハブに、アハブの預言者たちと同じように、「**攻め上って勝利を得て下さい。主は敵を王の手にお渡しになります**」(列上22:15)と言います。アハブは驚き、真実だけを言えと迫ります。するとミカヤは、「**イスラエル人が皆、羊飼いのいない羊のように山々に散っているのをわたしは見ました。主は、『彼らには主人がいない。彼らをそれぞれ自分の家に無事に帰らせよ』**と言われました。」(列上22:17)と答えました。戦争ばかりするアハブのゆえに、民が疲弊しているのを見なさいと言うのです。これがミカヤの見たイスラエルの現実でした。そしてさらに、「私は主が御座に座しているのを見た。主はアハブを滅ぼすために、偽りを言う霊を、預言者たちの口に送ると告げた」と言うのです。「主を見た」という言葉は冒涇となり、「預言者たちの口に主が偽りを言う霊を送った」という言葉は、預言者たちが偽りを言っていると非難することになります。王たち、アハブの預言者たちはミカヤを、神を冒涇する者、預言者たちを誹謗する者として、怒り狂います。預言者の一人ツイドキアがミカヤに近づき、頬を殴りました。そして、アハブはミカヤを獄に入れたのです。自分の気に入る預言者の言葉が真実とは限りません。そのため、偽りの預言を聞くことになります。ミカヤの偽りの預言の通りに、アハブは敗北を喫し、戦死します。汚れた霊の入った豚の群れが湖になだれ込み、死んだように、アハブは死んだのでしょう。

ミカヤは牢に入れられたまま、亡くなったのかもしれませんが。預言者エリヤはアハブ、イゼベルを避けて逃亡していましたが、ミカヤは王たちの前に引き出され、頬を殴られ、投獄されました。この姿はイエス様が味わった最後の苦しみと同じように思えます。イエス様は「**しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。**」(マタ 5:39)と言っておられ、その通りになって、ご自身の身に辱めを受けられました。ミカヤの自分の身を犠牲にして、民の平和を願って戦った姿が列王記(上)の最後を飾っています。